

# 博物館だより

No.28

平成20年8月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行  
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13  
TEL 0930-33-4666  
FAX 0930-33-4667

## 夏の企画展 「不動Ⅲ」向井澄男写真展

開催中!

当館では企画展「不動Ⅲ〜向井澄男写真展」を開催中です。

京築の風物を撮り続けた写真家・故向井澄男さん(築上町)が撮影した祭や自然、季節の移ろいを捉えた写真120点を展示中です。

■開催期間 8月17日(日)まで

■開催場所 博物館企画展示室

■観覧料 常設展の観覧料をご覧ください。ただけです。



▲松尾山麓に広がる棚田の風景 (築上郡上毛町西友枝地区にて)

### 7月の活動記録から

●職場体験学習が行われました!  
7月8・9日、犀川中学校2年生3名が博物館での職場体験学習に挑戦しました。



▲出土土器の整理作業を行う中学生たち

清掃に始まって、土器の洗浄・接合といった収蔵資料の整理作業、企画展の会場準備や来館者案内など、生徒たちは多様な職務に真剣かつ適切に取り組んでくれました。

●古代の土器作りにチャレンジ!  
7月17日、城井小学校6年生12名の皆さんが博物館で「モノづくり」教室にチャレンジしました。



▲土器作り挑戦中! 理想の形にするのは難しい?

体験学習メニュー拡大のため試験的に行った今回の教室ですが、皆さんに「楽しく学べたよ!」といったもらえたのが何よりの一日となりました。

### 小学生 歴史たんけん作文コンクール作品募集中!

小学校5・6年生を対象に、夏休み中に歴史について調べたことなどをまとめた作文を募集しています。ふるって応募して下さい!

なお、応募要項は7月発行の「博物館だより(第27号)」を見るか、博物館(☎333-4666)まで直接問合せ下さい。

### 博物館友の会主催 文化講演会のお知らせ

博物館友の会が主催する文化講演会が以下の日程で行われます。会員以外の方も聴講いただけますのでお気軽にご参加下さい。

■日時 8月24日(日) 13時30分~

■場所 博物館 研修室

■講師 北九州市立大学教授 八百啓介 先生

■演題 「近世の長崎街道と小倉藩」

■備考 会員以外の方は資料代として300円(実費)が必要となります。

### 8月期歴史講座のご案内

【漢詩文講座】 8月2日(土) 9時30分~

【古文書講座】 8月9日(土) 10時00分~

【金曜古文書講座】 8月22日(金) 10時00分~

【みやこ学講座】\*現地見学 8月23日(土) 9時00分~

【古典かな講座】 8月23日(土) 9時30分~

### 《古文書解読コーナー》

① 由新

② 〈ヒント〉人に会うこと

③ 由織

④ 〈ヒント〉〇〇はかま

⑤ 由様

④ 〈ヒント〉マダム

⑤ 由依

⑤ 〈ヒント〉おくれて来る

⑤ 〈ヒント〉ないがしろにする

◎答え

(反対向きに見てください)

(罪科)①②③④⑤  
① 由新  
② 由織  
③ 由様  
④ 由依  
⑤ 由新

みやこの歴史発見伝 ⑪

育徳館オランダ人教師

雇用顛末記 ①

ファン・カステール

明治四年（一八七二）五月八日、豊津藩（旧小倉小笠原藩。明治四年七月の薩摩置県により豊津県）は一年間の契約で、一人の外国人を雇用しました。その人はオランダ人で、名前をファン・カステール（Van Casteel、当時二八歳）といました。英語・フランス語の教師として雇ったもので、給料は一ヶ月一七五両でした。同月一〇日、政府は「新貨条例」を公布して、一両一円としましたので、カステールの月給も一七五円ということになりました。現在の貨幣価値に直すのは難しいのですが、米価を基準に換算すると、月給二〇〇万円といったところでしょう。

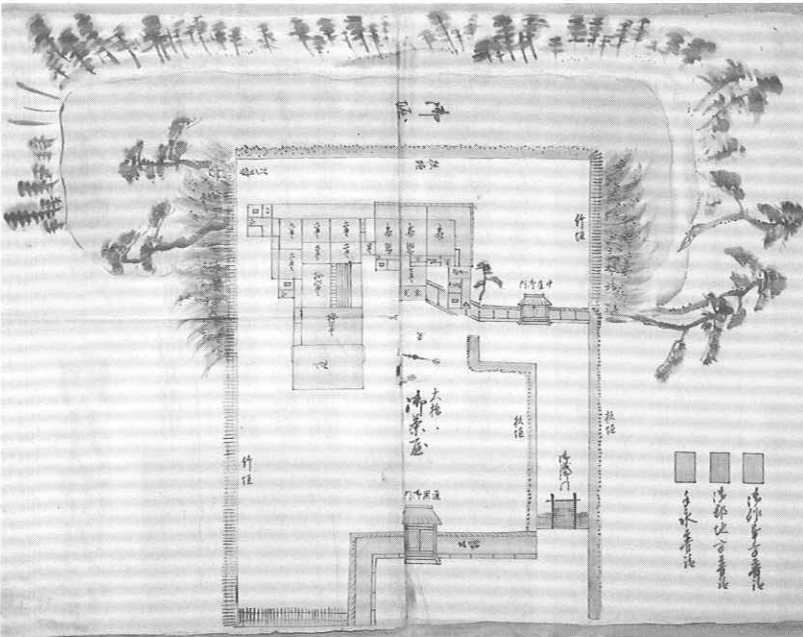
第一次大橋洋学校

カステールを雇ったのは、豊津に開かれた豊津藩の藩校・育徳館で教鞭をとらせるためでした。育徳館は明治二年（一八七〇）一月に、豊津藩庁近くに開かれましたが（現育徳館高校運動場の土地）、開校当初は小倉時代の藩校思永館（小倉城三ノ丸に所在）

と大差のない、儒学中心の教育を行っていました。しかし、西洋の学問・文化を学ぶことは必要と考えられ、明治三年一〇月二〇日、育徳館の分館として、仲津郡大橋村（現行橋市）の旧「御茶屋」の建物（現行橋市中央公

民館・大橋公園内に所在）を使い洋学校が開かれました（以下、第一次大橋洋学校と仮称）。「御茶屋」は江戸時代の公営施設で、藩主や役人が休泊するためのものでした。時代が変わり、休泊施設としては不要となったため、洋学校に転用されたのです。

この第一次大橋洋学校の教員は全員が日本人（信濃や静岡などから招いた）で、主に英語の訳読が行われたようです。生徒には、岩垂邦彦（NEC創業者）、早川智寛（第四代仙台市長）がいました。



▲仲津郡大橋村の御茶屋（小笠原文庫所蔵絵図）

江戸時代の公営休泊施設「御茶屋」が明治3年10月から洋学校の校舎に転用された。建物の背後には堀があり、生徒らはそこに自生する蓮の実や菱をとって食べたという。周囲の藪では、刀で竹木を打ち切って遊んだ（伊藤景直「思出の記」より）。

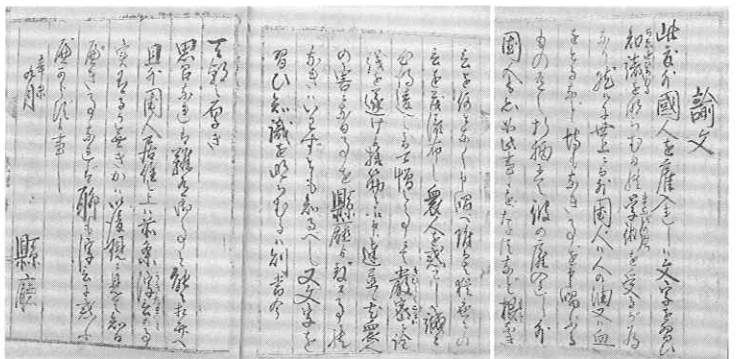
九 入り難航

明治四年四月八日、育徳館は「改革に付き」一時休校しますが、これは洋学所を設け、本格的に洋学教育に取り組む準備のためだったようです。おそらく、カステールとの契約開始日である五月八日に学校を再開する予定だったと考えられます（実際には五月二日再開）。カステールには育徳館の洋学所で教鞭をとらせ、それにあわせて、第一次大橋洋学校は段階的に育徳館に統合し、閉校する計画だったようです。

しかし、実際には予定どおりには運びませんでした。カステールが育徳館で教鞭をとることに不都合が生じ（具体的な理由は未詳。藩内の保守排外派の反対によるものという）、九州に向けて出発することすら出来なくなりました。しかし、契約は履行しなければならなかったため、窮余の策として、六月七日、東京の豊津藩邸に在京の藩士子弟を集め、カステールの洋学授業が始められたのです。

根も葉もない噂

東京でのカステールの授業は八月二日に打ち切られ、ようやく九州に赴くことになりました。九月一日に海路東京を発ち、九月一二日に沓尾



▲豊津県「論文」

明治4年9月、豊津県は「西洋人は人の油または血をとる」という噂話を否定した「論文（さとしぶみ）」を高札場に掲示した。

港（現行橋市）に到着した彼ですが、それでも豊津には入ることが出来ませんでした。理由について様々な説がありますが、当時豊津近辺で、西洋人が来ること住民が動揺し、「西洋人は人の油、または血をとる」という、根も葉もない噂が流れたことも理由の一つのようです。豊津県はその噂を否定するため高札（法令を墨書した木札）を立てますが、結局、カステールの豊津行きは断念せざるを得なくなりました。西洋人教師による本格的な洋学教育の構想が危うくなったのです。

（川本英紀）